

山崎增造著述  
赤痢速治法

252  
443

特50  
195



山崎増造著述

治法全

尚綱堂藏版

明治  
39 7 25  
内交

### 自序

六ツケ敷い理窟や複雑な治療法は。専門の醫學書で、見ればよいのである。私の實地經驗に依ると、毒にも害にもならない安全な薬で、最も有効な療法がある。其の薬は誰れにでも自由に買ふことが出来て、而かも、二日か、五日、長くても七日以内に、彼の猛烈な赤痢病が治するといふ處方であります果して、病氣が治するとしたら、素人としては其れ以上研究の必要はあるまいと思ふ。夫レでありますから、醫者嗅い用語は、はぶける丈け省きて、素人に読み易く且つ、自己療法の出來る様に書いて、公衆の實地應用に供したいと思ふ熱心から、赤痢速治法と題し、此の小冊子を著述した譯であります……

明治三十九年七月 日

著 者 誌

# 赤痢速治法目次

第一章	端緒	一
第二章	赤痢の病狀	八
	未歴・病狀・急發症・緩發症	
	第一期治癒  第二期治癒	
第三章	治療法	一四
(一)	攝生法	一五
(二)	消毒法	一七

(三)	服藥法	第一方驅蟲劑	第二方頓挫藥	二
		第三方持長劑		一九
(四)	豫防療法			三三
第 四 章	病原及び自家消毒			三六
	[甲] 病原			三六
	[乙] 自家消毒			四一
第 五 章	避病舎又隔離舎の設計			四三

目 次 終

赤痢速治法

山 崎 増 造 著述

第一章 端緒

赤痢病は、猛烈な傳染病であつて、從來の治療法は區々なので、死亡する數も少なくなかつた……好し死亡しなくても其の経過は非常に長く、甚だしい苦痛があつたのですが、余は二十有餘年前から、其の治療に就いて、種々の工風を凝らして見た結果、最も簡便で、素人<sup>しょうと</sup>にても治療の出来る方法を案出して、各所の避病舎や、自宅患者に實驗したのであり

二  
ます。其の方割で治療すると、患者は忽ちに苦痛が輕快して、二日乃至七日間の中に治るのである。故に患者は非常に喜んで歓迎して居る。甚だしきは餘りに治癒が早いので、却つて誤診したのだと云ふ輩もあると同時に、同業者からは激烈な中傷的の攻撃も受けた。或る一派の醫師は、治療學上の反則であると云つて、騒いで居る先生連もある。其の實、素人が藥名を知らぬを奇貨として内々、余が治療方を應用し、其の有効である事を承知して心中敬服しながらも猶ほ、嫉妬の念を禁じ得ないで陽には不可説を喋々する卑劣漢と、碌々赤痢病者を診療した事もない卒業ぬくぬくの先生連が、試験前にかじつた本に書いてないのに驚

いて、反對するとの二者に過ぎぬやうである。夫れであるから、明治三十一二年の頃、余は自家考案の治療法を、静岡縣醫學會雜誌に發表して先づ縣下の先進者に意見を問ひ、次いで東京中外醫事新報及び名古屋市に於いて發行する中央醫學會雜誌に投稿して、汎く博士大家の叱正を請求した。又一方には静岡新報紙を借りて、一般公衆の参考にも供した事がある。それから以來は、餘り攻撃の聲は聞かぬが、また書物ばかりに依頼して居る自稱學者先生連の多くあるので、兎角患者の経過を延長し苦惱せしめるのは遺憾に堪へぬ。

元來余の考案せる治療法は、極めて簡單でありますから、必ずしも醫師

の手を煩すには及ばぬ。素人が自分で容易に出来るのであります。夫れで其の薬は一日分が一錢か二錢足らずで買はれる。而も醫師の證明書杯はいらない普通薬でありますから、何處の薬種屋にもありまして直ぐ賣り渡して呉れる。此の薬名や用の方、後章に記すが唯それを服用して攝生方を嚴格に行へばよいので余が二十年間の經驗に徴して確く誓ふ所であります。若し疑信があるなら、何縣でも遠近は言はぬ。一郡なり市町村なり大流行で困る場合があつたら其の治療方を余に托して、見て貰ひたいと思ふのである。余は決して營利を計るのではない、眞實今日の病者が甚しく苦惱して長く避病舎の片隅に呻吟して居るのが、

氣の毒にたへないので一日も早く多くの人に知らして、其の苦境から救ひ出したいと同時に、國家經濟上聊か貢獻したいと思ふからである。又今現に流行しては居ぬが倒ばぬ先の杖に此の治療法を研究して見たいとか、豫防の参考にして見やうと云ふ意で或る町村とか團體で希望するなら喜んで應ずる事も辭せぬのである。然し余は自白する、種々の情實が纏綿して居て、自縣下ですら此の治療が信用されぬ事を。況して他府縣下の人が信用せらるゝ筈はないと云ふ事を、けれども論より證據だ。赤痢病が速かに輕快する上に、多大の薬價と費用を要するのでもなく、實に有益な輕便な事であるから、萬人に一人でも、余が考案を試験

して貰ひたいそして唯の一人でも、命の親だと喜んで呉れる者があつたら、余はそれで満足する。元來余は淺學であるが二十有餘年前靜岡縣の縣立病院であつた時代から公立病院となり次で今は余が私立病院となるまで繼續して居る間の經驗から割出して防疫の實際を行つて見やうといふのであるから從來屢々失敗した事柄に徴して多少は償ひ得らるゝであらうと信じて居る。世の滔々たる馬車馬的學理、余は寧ろ其の危険を恐れて止まぬのである。偕て效能的の長談議に時間を移して、否な頁數を重ねまして、御讀みつ苦しき段は何とも恐縮の外はありませんでした。然し夫れだけの埋合せは、以下説述する所で、十分に積

りでありますから、幾重にも御用捨が願ひたい。茲で直ちに治療法を書いて仕舞へば、譯はないのであるが。だうもさう早道も出来ぬと云ふのは……赤痢病と云へば誰しも、八種傳染病の内、最も多く流行して猛烈を極める恐しい悪疫であると云ふ事は承知して居ませう、けれども其の病狀は一度病んだ者か又は其患者の親子とか、姉妹の間柄で、始めから看病でもした事のある人でなくては病の様子が知れぬ。病狀を知らぬで、治療法ばかり知つて居ても、何の役にも立たぬ。であるから先づ其の來歴及病狀の大體を説明し、次ぎに治療法に及ばうと思ひます。



## 第二章 赤痢の病状

來歴、赤痢と云ふのは、從來痢病又はアカハラと唱へたので昔しより年々秋の末になると、各地に散在して發生しますが、又た時々一地域に大流行を致して絶えた事はないやうであります。近くは明治二十七八年の日清役のあとで著しく増加して、死亡の數も多くなりました。西洋にては古代より小亞細亞、希臘及び伊太利に流行した事が舊記にある。其の流行の猖獗を極めたのは、十六世紀の頃からである様だ。支那にては古來腸癖、大瘕瘕と稱し、痢と云ふのは近世の語だと云ふ事があります。

**病状** 赤痢病に罹つた人の初めの病状即ち容體はいろくになつて來るので、一樣に云ふ事は出來ぬ。けれども**急發症**と**緩發症**の二つに大別して書いて見やう。

**急發症** は前日來便秘して居る人が、俄かに腹痛して、便意を催し、身體が不快となり、**高熱**を發し頭痛がして業務に堪へぬので床に就くやうになる夫れで安靜に寐ても居られぬ程の**苦痛**があつて大便に通ふ。始め二三回は普通の黄色な軟便であるが、暫時にして血液を混じた**粘液便**となる……**粘液便**とは布海苔の溶かしたの、様に、ねばくとし、て薄黄色な事もあるが又た玉子の白身の様で白色なものも出る。鼻汁の

様なものもある。之れに血液を混じることがある。その場合には、血の多少に依つて濃き血色の時と、薄き血色の場合とがある。斯の様な大便が排泄して、下腹が重く膨を覺えて努責の起る時は、赤痢病の前兆であると云ふ事を忘れてはならぬ。此の容體は、發病より三時間乃至六時間の内に起るのが通常である。夫から頻りに便意を催し、屢々上圍するけれども、排便は少量の粘液若しくは血便で、排泄の前には絞る様な腹痛が起つて、劇しき努責と苦痛は次第に増して堪へられぬ。で大聲を發して叫喚する人もある。之れを裏急と云ひ、上圍のあとで猶ほ遺足らぬ様な不快の氣味を残して、頻りに上圍を促す之れを後重と云ふので御坐

います。此の裏急後重はだうしても歇まぬので晝夜に少なくとも十回以上多きは四五回も上圍するから、患者は少しも安息する事が出来ぬ。で忽ち疲勞を來し、衰弱して不眠症となり食慾は缺乏して、惡心が起つたり嘔吐をしたりする。又蛔蟲を嘔出する事もある。煩渴して顔貌は瘦削する。斯の如き容體で六七日經過すると、今までの粘液便は、漸く變じて膿血便となる。さうなると、病勢は一層悪性となり、遷延して何時に至つて、治癒するとも定めが附かぬ、で死亡する事もある。然し病初から、攝生を嚴重に守つて、治療法が宜しければ、速かに治するのであります。殊に余は自家の考案を實行すれば二日乃至七日以内で治癒するから、

之を赤痢病の第一期治癒と稱します。此の第一期の治癒期を逸すると、前に述べた膿血便を排泄するやうになつて、七日以上の経過を取らねば治癒しない之れを赤痢病の第二期治癒と稱します。小兒は所謂疫痢余輩は颶風病と稱するのが、轉じて眞正の赤痢となる事がある。然し病毒は、全然異なつて居るには相違ないと思ふ。けれども初發の症候では、未だ鑑別する事が出来ぬのである。

緩發症は、前に述べた急發症のやうに際立つて、發病するのでなく、始めから緩慢に起るのであります。時候あたりと云ふ様な工合で、下腹に重感を起したり膨滿を覺えたりして時々便意を催し上圍して瀉下すれば、

少しく爽快を感じ、又飲むとか食するとかすると、忽ち腹痛がする。而も始めは矢張り普通の便色のものを排泄するが、次第に粘液便となり、晝夜五五行乃至十回位排泄し、或は上圍しても唯だ努責するばかりで、毫も排泄せぬ事もある。或は最初は普通の腸加多兒で、幾日も経過して居る内に、何時ともなく漸く赤痢の症狀に變じて來る事もある。斯様な容體であるから、格別身體に苦痛も起らず、腹も空き、食も喰べるので、患者自らもそれ程に意に介せず、三日も五日も経過する事がある。けれども是れは油斷なので末には急發の症より重症に陥り易いから、注意せねばならぬ。兎も角も夏日の流行時に際して、腹滿したり便意があ

つて上圍しても快通せぬで努責するとか粘液便が排泄するとかいふ場合は早く余が治療薬を服用し。而して飲食物の攝生法を守らなくてはならぬ。若し赤痢でないにした處で、此の仕方では養生すれば、三四日で治癒するから、決して損な事はないではありませんか。

## 第二章 治療法

**治療法** 前に書いたやうな容體があつたなら、醫師の診断を待つまでもなく、赤痢病に罹つたのであると**断定**して、其の症状の急發症であらうと緩發症であらうとに差別なく、次ぎの攝生法と消毒法とを嚴重に

實行しなければならぬ。

〔一〕**攝生法** 飲みものと食ふものとを斷然と廢して、業務を止め、安靜に休息し、口が乾きて困る場合には煮沸水を冷して置き、それで含嗽するに止め決して飲物をやつてはならぬ。殊に此の攝生法は、初め三四日の所が最も肝要なので、若しも此の我慢が出来ぬと、生命に關する一大危険に陥る、幸に死せぬとしても病が重症になり長く苦痛しなければならぬ。「命は食にありと云ふ様な野夫の言を信じて喰つて飲んで居れば病氣が治ると思ふのは大變な心得違である」。處が素人ばかりでなく、免狀のある醫者までが、さう云ふ考へ違ひをして居

るのであるから、長嘆息に堪へぬ。腸の粘膜が腐敗して、壞疽に陥つて、膿血の出てる場合に、飲食物を與ふれば、局所を刺戟して、病毒の繁殖を助成し、病勢の愈々増悪して來ると云ふ事を思はず、滋養物が取れぬと衰弱が怖ろしいなどと云ふ者があるが十日や三十日食物を停止したからつても、決して、それが爲めに死ぬるものではない。病毒の侵襲を防ぎて、早く驅除してさへ仕舞へば、衰弱はせんで済む。好しや、多少衰弱した處で、病が治すれば、恢復するに極つて居る。然るに治療に一定の方針がなく、病菌の産物たるトキシンの中毒が心臟衰弱の原因になると云ふ事を悟らずして、營養不給に由つてのみ、衰弱

するものだと誤信し、自己が不明の責任を、衰弱に負はせて、屢々處方を轉じ、無用な藥劑を、幾種もくゝ與へて、自然の治癒を妨げ、猥りに滋養物と稱する物質を勧めて、患者を苦めるのは、所謂醫者の、病人泣かせ……否遂に人殺である余は斷じて不同意である。

三二 消毒法 排泄物即ち下痢した大小便は、少しも所々へ散亂してはならぬ。一度でも便所に排泄したら先づ取りあへず、釜戸の下の熱灰を出して、多量に散布し、蠅蟲等の來ても、其便の附着せぬ様にし、次回よりは、陶器製の器具か、石油罐の様なものに取り、毎回石灰粉を散布して、蓋をして置き、其の器に堆積して、來たら生石灰乳でも、石炭酸

水でも、適宜に混加し、其の器に、電信線の様な張り線を附けて、釣張を造り、屋敷内でも宜いが、或は畑中へでも持ち行き、地上より一尺五寸位につるし、其の下で火を燃やし、煮沸した後ち、地中へ埋めるのがよい。それから、自身の衣類や夜具及び食器等は、時々熱湯で消毒し、上圍毎に、手を消毒しなくてはならぬ。病氣を隠蔽したり、消毒を怠つたり、不衛生をしては自分が重症になり苦しむばかりでなく、近くは家内中のものに傳染し、其れから出入者の親類や、友人、及び近傍の隣家等に移るから、義理にも、かくしたてをしてはならぬ。隠せばかくす程、自分の病氣は重くなり、傳染力は強くなるのであると

云ふ事を忘れてはならぬ。

(三) 服薬法 薬劑は病氣を治療するには、必要であると同時に、又害となる事も多いのであるから、決して素人考へで無鐵砲な事を行つてはならぬ。殊に發病の初めにやりそこねると、大變になるから無闇に下り止めの賣薬杯を飲んだり又醫者の處へ使をやつて下痢しますから止まる薬を願ふ杯と云うて診察も受けずに止瀉の薬を貰つて服してはならぬ。それが極めて危険なのである。斯る危険を冒さず左の方法で行つて貰ひたい。

第一方として驅蟲劑を用ゐるがよい。其の方法左に

サントニーネを頓服する事は必要である。此の薬劑はセメンと稱して、賣藥であるからどこでも求められる。一體赤痢病に罹る人の腸中には、十中七八人までは蛔蟲が出来きて居る。是れを驅除して置かぬと病氣の経過を妨げて、意外の餘症を起すことがあるから、其の豫備療法として必要なのである。此の驅蟲劑を服してから、一時間か二時間を経て左の頓挫劑を用ゐるのである。

第二方として頓挫藥を用ゐる。其の方左に

舍利鹽 二〇〇瓦 (大凡五匁)

淨水 五〇〇瓦 (大凡二勺)

右調合して溶解し一度に頓服するのです。

此の頓服をして二三時間を経ると一二行の水瀉みづくだしが来る。是れと共に、蛔蟲も排出される事が通常であります。それで十分に便通があると、頓に腹痛も去り、熱も下り稍や輕快する。けれども又三四時間の後には劇しき裏急、後重が起つて来る。殊に此の薬で、十分に水瀉せぬ場合には、少しも緩まず苦悶するものであります。故に頓挫藥の効はあつてもなくても夫れには關らず、引き續いて、左の方劑を持長して、病の治するまで用ゐるのである。

第三方として、持長劑を用ゐる。其の方左に

舍利鹽 二〇〇 大凡五匁

淨水 一〇〇〇 大凡五匁

右溶解するを待ちて、朝晝晩の三回に分ちて、服用するのである。則ち第二方の頓服のあとで三時間を経たら、此の方劑の一回分を服するのです。但し此の藥は晝間三回に用ゐると、夜間に服するのがない。けれども輕少で安眠の出来る患者は、夜間の服用を歇めて置いても、よいのであります。が重症で安眠も出来ず裏急、後重の強く起つて來る場合には、夜間服料として更に前法を調合して三回に用ゐるのである。さうすると、早きは一二日長きは三四日の中には著しく輕快し

て、粘液便は變じて水瀉となり裏急、後重は去つて漸く食慾を發して來る。元氣も回復して爽快となる。斯の様に輕快して且つ安眠するに至らば、勿論夜間の服藥は止めて宜しいのである又た舍利鹽の二〇、〇瓦を減じて、一五、〇とし、全く粘液便のなくなるまで、五日でも十日でも二十日でも持長するのであります少し恢復したからと云つて、直に服藥を止めてはならぬ。

右の分量は、壯年の男子に適して居るが、女子や子供には、減量しなくてはならぬ。七歳未滿の子供は恐らく服さぬ。けれども病症によつては、舌の味神經が麻痺して仕舞ふので、只だのみたいと云ふ飲慾は



かりになるから、喜んで服するのもあります。左に分量の大要を記しませう。

壯年の女子は

一五、〇瓦

五歳以上十歳未満は

三、〇乃至一〇、〇瓦

十歳以上十五歳

は 一〇、〇乃至一三、〇瓦

十五歳以上

は 一五、〇乃至二〇、〇瓦

小兒で此の薬を服さぬ時は、舍利鹽に代へて、甘汞と云ふ無味無臭の粉薬を用ゐて、治療すると、舍利鹽と同様な效はあるが、是れは薬が劇薬であるから素人用とする事ができぬから、茲には記さぬ。是れは

醫師でなくては、用ゐる事が出来ぬ且又其の用法を誤つて居ては、醫師でも效能が現れないのである。

右に述べる様に、發病の當初から攝生を嚴重に守り、他の薬劑を用ゐずして、第一方、第二方、第三方を用ゐて居れば、叫聲を發するやうな苦痛もなく、経過は一日か三日で恢復する。長くても五日か七日を過ぎないで排泄物は粘液性より水瀉便となりて治する。之れを第一期治法と稱します。是れが則ち余の速治法なのである。然し初期の療法を誤ると、勿論七日以上に亙り粘液便は變じて、膿状便となり、之れに血液が混ざるから膿状血便と云ふのになる。是れは一段病勢が進

んで、腸管の一部が膿壞して排泄するのであるから、かうなると、最早病氣は容易に治せぬばかりでなく、其の苦痛も堪へ難ないのである。夫れは初期に於いて、不攝生で飲食を慎しなかつたとか、醫者の投薬が止瀉薬であつたとか、止痛劑の濫用とか、賣薬等に依頼したとか云ふ結果なのであります此の如く不幸の結果に陥りてからの治療を第二期治法と云ふ。此の場合に於いても裏急、後重が頻々で、苦惱のある時は、矢張り舍利鹽劑を用ゐてよい。其の方は左に

舍利鹽 三〇、〇瓦 (大凡八匁)

淨水 二〇〇、〇瓦 (大凡一合)

右調合して、晝夜六回に分けて服用するのである。けれども、此の期に於いては、著しく衰弱して來るから、葡萄酒を少しづつ、飲用するがよい。其の量は平素酒を嗜む人と嗜まぬ人によりて異なる、故に分量を定める譯けには行かぬが、餘り酩酊ぬ程度で用ゐれば、害はありません又口の乾くには、味淋酒を少許づつ、塗布し、夫れを呑み下しても差支はない。滋養料としては、少量の牛乳とかスープを用ゐるのは、普通醫師のやる所である殊に米甘汁を是として居るが、是も醫師や素人の信用する程よいものでない時としては甚しき悪心を催し、漸く振はんとした食慾を害し、長く食機を妨げる事がある。余は葛粉湯と

牛乳とを用ゐて居て、食慾が進むに従つて、蕎麥泥そばがき及び軟飯を食するの  
 がよいと思ふ、飲料の多きはよくない。是れ以上の療法は醫者でな  
 ければ出来ぬので此の書に記述する必要はないから、之れで筆をや  
 めやうと思ふが、更に前述する處を繰りかゝりて書いて置きませう。  
 前に述べた通りの攝生方と、舍利鹽劑の服用を實行さへすれば、第一期  
 治法で治するに相違ないと云ふ事を確信して居る。此の舍利鹽と云ふ  
 藥は、昔の漢方時代から用ゐられて居る。極めて價が易い、壹斤の代價  
 が五六錢なのである……壹斤あれば、大抵壹人を治するだけありま  
 す。其れで醫師を頼むにも及ばず、賣藥杯は無論禁物である。鶏卵もス

ープも食してはならぬ。であるから費用も掛らない。で七日以内に治  
 するから長く避病院の厄介になるには及ばぬから、赤痢病に罹つたと  
 しても恐怖したり隠蔽したりする必要はないではありません乎。それ  
 だから、赤痢病に感染したと思つたら、醫者の診断書を附けるにも及  
 ばぬから、自分で役場なり巡查になり、私しは赤痢病に罹つて居るや  
 うでありますから。消毒法を行つて居ますと云へば、先きでは御役目だ  
 けの事はするのである。然し醫者に罹らぬと云つて、罰金を取られる規  
 則はないから、安心して公然と届けて消毒法を行ふがよい。たとへ自分  
 だけは病みぬけて治するとしても、消毒が不充分であると、後とから家

族に感染し、續いて近隣に蔓延して、大變な事になります。夫れでは人道とか公德とか云ふ事に戻り、多數の人から恨まれるだけでもつまらぬ。又赤痢病が感染しますには、始めから一軒の家で一度に三人も五人も發病するのではない。先づ一人の發病者があると、夫れを隠蔽して置くから消毒法が十分に出来ぬ否なく消毒を行はずに居るのである。そこで次の家人が感ずる。又次の家人に染ると云ふやうになり、遂には五人も七人も枕を并べてビチリんと漏れ流しの慘狀となり、是れより四方八方へ蔓延して、行くのである。故に一家の内から一度に五人も七人も傳染病の届けを一度に出すと云ふやうなのは隠蔽の罪惡を犯して居る事が證明せらる。

以上説述したところを更に括約して言へば。發病したと思つたら、飲食を禁じ、舍利鹽を水に溶かして服用し、消毒を行ひて休養し決して止瀉藥を服してはならぬと云ふ事を、呉れくも忘れてはならぬ、發病の當初、若しも止瀉藥のモルヒネの注射とか阿片劑は勿論賣藥の止瀉藥でも服したら最早七日や十五日では治せぬ。で片足は棺桶へ突き込んで居る様なものだ、よし兩足を突き込まぬまでも二十日や三十日は避病舎に居て同情の少ない看護者の厄介になり、苦惱煩悶して、生地獄の思ひを忍ばなければならぬ。余は毎常此の憐むべき患者に接して居るか

ら氣の毒でたまらぬ。

〔四〕 豫防療法 赤痢の流行時に際して、腹が膨脹たり、大便が秘結したり、身體が不快で食味がよくなって、頭痛がすると云ふやうな場合とか、又下腹が重く、膨る様な氣味がして、少しづつ、便意があつて下痢するが、何度上圍しても遺足らぬやうな不快を覚え、食慾が振はぬで、喰へば直ぐに服痛がして、便意を催すと云ふ様な時は、赤痢の前兆で、否寧ろ既に赤痢と云つてもよい事がある。大便は少量で、泡の如き、鼻汁の如き粘々したものに、血液が混じて出る事もある。斯の容體があつたら、速かに左の藥を服するがよい。

舍利鹽 二〇、〇五 淨水一〇〇、〇五に溶解して三回に分

ち、朝・晝・晩に服すのだ。

此の容體のある時は、斷じて食物も、飲みものも、致してはならぬ。飲食を歇めた爲めに、口が乾いたら、糞沸水の冷やしたので含嗽し、少許の葛粉湯を食するがよい、牛乳や鶏卵は食してはならぬ。一二日たつて、氣分が快復して來て、空腹を感じたら少量の粥を試み、次いで飯に移る様にするがよいのである。重複はするが、更に詳しく書いて置きませう。赤痢病に罹ると、始めから全く食慾の缺乏して仕舞ふ人と左程食慾の變ぜぬ人、とある。夫れで食慾の缺乏した人は無論であ

るが、食慾の變ぜぬ人でも、此の病に罹るか、又その前兆でもあつたら、其の日より斷然と食物を禁ぜなくてはならぬと云ふ事は、前にも述べた如くであるが、段々病氣が治癒つて來るに隨つて、食物を取らねばならぬ場合になるが、其の加減は甚だ六ツケ敷い。何なれば、病勢が少し怠つて來ると、非常に食慾が起る。けれども、多くは病的の食慾にして、眞の生理的食慾でない事がある。此の時に少し、餘分に食すると實に危険なのであるから、十分に制さねばならぬ。故に何れにしても過<sup>か</sup>ま<sup>ち</sup>の<sup>な</sup>い分量の一例を擧げて見やう。

### 禁食

初發及び第二日は 前に書いた第一・第二・第三方の藥劑を、必ず用ゐる事

三日目乃至四日目。に至つて、熱も下り腹痛も減じ、爽快となり、食慾が起つて、制する事も我慢も出來ぬやうになつたら、牛乳五夕づつ、朝夕飲用して宜しい。

五日乃至七日 に至つて、益々空腹を感じば、晝と晩の兩度一碗宛粥食を試みるがよい。夫れで猶ほ空腹で堪へぬやうであつたら、次第に粥を増し、飯食に移るも宜しい。但し便通は毎日一二回宛附けて置くのがよいから時々舍利鹽劑を服する事を忘れてはならぬ。

以下赤痢の病原及び自家消毒の方法に就いて附言し、次ぎに避病舎の改造と、余が理想的設計を述べて見やう。

#### 第四章 病原及び自家消毒

##### 〔甲〕病原

**原因** 赤痢の病毒は、腸の粘膜を侵して、壊死性炎症を發するから、膿と血とを漏出し、大便になつて下痢すると同時に、甚しい痛苦を生ずるのである。病毒とは何なものであると言つた處で、未だ判然としては居らぬ。けれども、熱帶地方で流行するのは「アメーバ」であると云ふが、日

本で發生するのは、「アメーバ」ではなくて一種の微菌であると云ふ事は、皆人の確信して居る處であります。殊に志賀菌と稱する杆狀菌は、漸次世人の協賛を得る様ではあるが、全く一般の學者が認めたと云ふには至らぬ。

**病原** となる微菌は、肉眼では、とても見る事は出来ぬ。顯微鏡で見るとしても、餘程熟練な斯道の敏達家でなくては見分ける事は出来ぬ殊に赤痢菌の如き未確定のものでは、全く不明であると言はねばならぬ。けれども微菌には違ひない、而も其の發生力に至つては、甚だ迅速なものである。

今其の發生力を試験して見やうとなれば、先づ微菌の好んで發生する「スロープ」とか寒天の凝固したのを、硝子の試験管中に入れ。細き白金線の尖きを燒毒して、赤痢便の中へ一寸觸れて便汁の中を通じ、其れを右の試験管中へ挿入して移植し、吾人の體温と同等位の室内に靜置すると、忽ち放線狀や雲狀の斑翳を生ずる。此の斑翳で、大便中の菌種が發育した事と、繁殖の迅速な事が分かる、之れを取つて、鶏に與へると鶏は赤痢となつて、發病する事があるので赤痢病毒も微菌であると云ふ事が證明せらる。斯の通りであるから、赤痢患者の大便が、少しでも溝渠とか下水の中に落るときは、忽ち此の水中で繁殖するのである。況んや

大便の附着した衣類を洗濯するに於てをやだ。茲で十分に繁殖した赤痢菌は、水の流れに沿うて、堰に止り堀に行き、小川に移り、或は飲料水に侵入したり、又車馬貨物等に附いて行く事もあらうし草履下駄の類に着いて、四方八方に蔓延し、其れから手に着き足に付き、食物に混じ、飲料物に這り、衣類に附着して居て、知らずくの間、口中に入り胃を経て腸に至ると、腸中の營養を得て、茲で大いに繁殖して、吾人を苦めるやうになるのである。然し前に述べた如く、繁殖力は體内に於いても氣中に於いても、迅速ではあるが、外氣の寒き時は、氣中にて繁殖は出來ぬ。それであるから寒中は赤痢の流行が稀になるが夏の末から地温



が次第に高くなつて十月には最高點に達して、其の繁殖に最も適し、  
す故、毎年此の季節になると、赤痢が盛に流行するのであります。

**注意** 赤痢の流行する時に、食器を不潔にして置いては、勿論ならぬが、  
水で洗うて置くのは、危険だ必ず煮沸水で、洗はねばならぬ、果物は結  
構な嗜好品であるが、微菌が外皮に附着して居る事があるから、注意し  
て食さねばならぬ又野菜類の洗滌にも、水が危険だと云ふ事を忘れて  
はならぬ、鶏卵の外皮には、赤痢毒ばかりでない、結核菌も附着して居  
るから、消毒して置いて、破すがよいです。さしみ魚、冷麥、冷豆腐の如  
き凡べて冷水料理は、一切危険である。冷水は無論よいとは云へぬ。但

し完全な水道とか二十尺以上の下層より湧出する井戸とか、掘抜き井  
戸の、扱み立て水なら、少しも危険はないのであります。

### 〔乙〕 自家消毒

前に述べた如く、赤痢の流行する時は、何處の隅々までも、毒菌は蔓延  
して居て、知らずくゝ其の毒菌を吾人の腹中に呑み下すに違ひないと  
思ふ。然るに發病する人と發病せぬ人とあるのは、大に注意すべき事だ  
ある。吾人の胃の腑は健全でさへあれば赤痢菌でも、コレラ菌でも、腸  
チブス菌でも、將た結核菌でも、食物を消化すると同じ様に消化して仕  
舞つて、全く無害物にする作用がある故に、同じ赤菌を食したからと云

つても、甲の人は發病して患者となり、避病舎に送られたが乙の人は平氣で働いて居る事の出來ると云ふのは不思議なようであるが、(乙)は全く胃の腑が健全であるからなのである、之れに反して、(甲)は飽食家で胃病持ちで、常に消化不良の人に違ひない。又平素人の中で、養生家として自任して居る人がある。此の人がたまく、赤痢にでも罹ると、彼の人のやうに注意して養生するものが赤痢に罹るとは、不思議であると云ふが、其の人が養生すると云ふには、養生をしなくてはならぬ弱點があるからである。弱點とは既に胃弱で少しでも不養生をすれば、苦勞が起るからだ。素人の養生家なるものは、健康保續の方を誤つて居て、自ら

養生と稱して、身體を弱くして居るから、傳染病杯の流行する場合には、**イの一番に感染するのであります。**換言すれば二度二度の食物を、嚴正に守り、能く働いては休息し、決して餘分の間食をせぬやうにして居れば、何時までも胃は健全で居る。胃が健全であれば病菌を消化するから、發病の恐れはないと云ふ事を忘れてはならぬ。

## 第五章 避病舎又隔離舎の設計

今日の學問上の、識見に因つて、設計する完全の避病舎なれば、確實に病毒を消滅する事が出來るから、毫も恐れるには及ばぬ。去れば人情とし

し朝夕家人が面會の出来る様にして、患者を慰めたり看護者や監督者の態度を見聞するにも、便利な處に建つるがよい。さうなると患者も安心して居る事が出来る其の建方は設計の大小と費用の多少等に由つて、異なるが今理想的に其の概要を書いて見やう。

避病舎又隔離舎或は避病院と稱すのは、其の設計は極めて簡単な構造がよい。要は病毒の室外に散逸せぬやうにして天然と人工力と相俟つて容易に消毒の出来る様に建てさへすればよいのである。さうするには内圍の病室と外圍の訪問室との二重圍としなくてはならぬ。而して内圍の病室も外圍の訪問室も両つながらタ、キ土間として、消毒的の

洗滌水が、一所の暗渠内に流集するだけの勾配を附けるがよい。室内へは東西の日光が十分に透射して日光消毒の出来る様な方向にしてハメ板は八分以上の厚板で上等のペンキ塗にし。腰間戸を附け………腰の高さ内圍の病室では二尺五寸か三尺が適當であらう。硝子戸は四尺か四尺五寸とし、外圍の訪問室は一尺か三尺の腰で五尺以上の硝子戸を附け硝子はパテ詰めでなくてはならぬ。内圍の病室は三坪か四坪毎に假りの仕切板戸を附けて、上圍の便器等を置く處とし、一室毎に寐臺と、看護婦の腰掛と、消毒用の手洗水と、石鹼と、手拭等を備へつけておく此の室の窓には、金網又は鐵棒で格子を附けるがよい。排泄物は毎回消毒

ても、又監督の點から觀ても村端の山谷の中や市町の邊陲へ建つるの  
はよくないのである。市町村の中で、最も交通に便利な中央の所に設け  
るがよいと思ふ。近傍の人民が嫌うて苦情を云ふなら市町村の役場構  
内に建てるか、醫者の屋敷内へ特別病室として建つたら、苦情の云いや  
うはあるまいと思ふ。それで、豫防規則を今少し文明的の學理と併行す  
る様にして、人道的に行つて貰ひたいのである。今日の施行法は名こそ  
隔離法だと云ふが、其の實は重罪者の扱ひ方にもない嚴酷な……拘  
置であると云つても過言ではなからうかと思はれる位である。一度避  
病舎にオット拘置ではない隔離せられると親でも子でも逢ふ事は出來

ぬ。死に目にも逢へないで温かき家内より引き離されて冷たくて同情  
の薄い看護者や御役目の監督者の厄介になるのである。何程苦痛して  
も周圍には赤き同情を以つて慰めて呉れる家人は居らぬで、冷たい他  
人に形式的の看護を受けて、苦惱し、甚しきは憤慨に堪へぬで自殺する  
ものがある。さりとは、何とも悲惨の極みではあるまいか、斯の様な行  
り方であるから隱蔽もあるが、種々の弊害も起つて來る。豫防法は規則  
上の形式に止まるのみで、事實に於いては、效能はない。何程嚴重にし  
様としても、勞して費用損と云ふの外に過ぎぬ。而も避病舎の構造さへ  
完全であれば、何處に建つても危険はない又或る程度までは、交通を許

し朝夕家人が面會の出来る様にして、患者を慰めたり看護者や監督者の態度を見聞するにも、便利な處に建つるがよい。さうなると患者も安心して居る事が出来る其の建方は設計の大小と費用の多少等に由つて、異なるが今理想的に其の大要を書いて見やう。

避病舎又隔離舎或は避病院と稱すのは、其の設計は極めて簡単な構造がよい。要は病毒の室外に散逸せぬやうにして天然と人工力と相俟つて容易に消毒の出来る様に建てさへすればよいのである。さうするには内圍の病室と外圍の訪問室との二重圍としなくてはならぬ。而して内圍の病室も外圍の訪問室も両つながらタ、キ土間として、消毒的の

洗滌水が、一所の暗渠内に流集するだけの勾配を附けるがよい。室内へは東西の日光が十分に透射して日光消毒の出来る様な方向にしてハッ板は八分以上の厚板で上等のペンキ塗にし。腰間戸を附け……腰の高さ内圍の病室では二尺五寸か三尺が適當であらう。硝子戸は四尺か四尺五寸とし、外圍の訪問室は一尺か三尺の腰で五尺以上の硝子戸を附け硝子はパテ詰めなくてはならぬ。内圍の病室は三坪か四坪毎に假りの仕切板戸を附けて、上圍の便器等を置く處とし、一室毎に寐臺と、看護婦の腰掛と、消毒用の手洗水と、石鹼と、手拭等を備へつけておく此の室の窓には、金網又は鐵棒で格子を附けるがよい。排泄物は毎回消毒

し、患者の身體は毎日清拭して、消毒せる白衣と交換し、布團の上にも白布を敷き、日々交換するのである。外圍は内廊下の様ではあるが、椽の板を張つてはならぬ矢張りタ、キ土間で、巾は一間か九尺なら宜ろしい。此の處は何人が出入しても、危険はない。訪問者と患者とは格子越しに話しが出来るのである。又病室で治した患者は、別の室に移して五日とか七日とか猶ほ留置されるのが規則である。此の室は別に建てれば結構であるが、又訪問室の一部を用ゐてもよい。勿論此の患者は庭内運動を許して差支はないのである。又屍體を收容する室も入用である。其の他便所からいろいろな建物を爲るには、大體以上の考案で推考して貰

むたい床板<sup>ゆかいた</sup>を張つて疊を敷くのはよくないと云ふ事を忘れてはならぬ。交通を遮断するのは、傳染が危険だからと云ふのであらう。が、避病舎にして危険と云ふのは、構造が不完全で監督が無能であると云ふ事を表示するやうなものである。今日の學問上から云ふと完全な構造で監督がよければ、決して危険はない筈である。近年各地方で多額の費用を掛けて、新築して居る避病舎は實に不完全で二三十年前の舊式と比べたらば一見立派だが然しまたく、未開的の觀がある病室には床板を張つたり廊下を附けて敷物が敷いてある。而も日光の透射を遮断して、天然消毒を利用してなく、複雑な構造であるから、到底消毒の完全を期する

事は出来ぬ加之排泄物は敷物や床板こまいたに附着して、不潔を極めて居るが、患者の身邊を消毒することも出来ぬ。それで床下や廊下には毒菌が潜伏して繁殖するに適當な餘地があるから、衣類に附たり、下駄や草履に附いて蔓延するのである。況して監督が不行届きであつたら、殆んど消毒の效はない却つて病毒の集合培養所と云つても過言ではなからうかと思ふ。偕て斯の様な厄介物に組み立てるから、町端とか村境の僻地へ持つていつて建ねば危険でならぬ事になる。是れ近年流行の弊風であるが、新知識とか云ふ變妙な名の下に、無經驗な半可通學者を珍重し、買ひかぶり過ぎるから、誤つて仕舞ふのだ。彼れ等は二三十年も以前の

新説を、書物で見居て、其の今日に廢棄された事や實地の利害を知らないで、之れを實行せうとするからである。或る意味に於いては學校の積りで人民の利害は顧みず學問上の研究にする考であるかも知らぬが、先年或縣下の某郡で各村競うて避病舎を造つて一大疑獄の起つた事は、當時の新聞にも出て居るが、其の構造の立派な事は土地の小學校々舎にも勝つてあつた。けれども、文明的の避病舎でなく、蠻的の病人棄場に近いのだ此の一例を以ても知れる。行政監督が不親切であつたから、疑獄も起つた又監督すべき衛生の技師に一定の識見がなかつたから、大金を費やしてあんな蠻的の避病舎にして仕舞つたのだが、何と勿體

ないではありませんか。あの半分も掛ければもつと完全な文明的なのが出来るのであつたのにサテサテ……長太息々々々。……  
續いて、豫防法及び消毒法を記する筈ではあるが其の事は法律もあり規則もあつて、皆、人の承知して居る事であるから書いて置く必要もあるまいと思ふ。

### 赤痢速治法 終

明治三十九年七月二十日印刷  
明治三十九年七月廿五日發行

定價金貳拾五錢

著者兼 發行者 山崎 増造

靜岡縣小笠郡掛川町二百三十五番地

印刷者 中野 鏌太郎

東京市京橋區南小田原町三丁目九番地

印刷所 帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地



發兌元

東京市芝區芝町  
東京市神田區四番地  
東京市神田區八番地  
東京市東區備後町  
大阪市東區備後町  
南大塚町八十五番  
四丁目八十五番

尙綱堂 集成堂

東京市神田區小州町  
東京市神田區三番地  
大阪市東區  
備後町四丁目  
大野書店 山田書店





K-2

静岡縣掛川病院長 山崎増造先生著

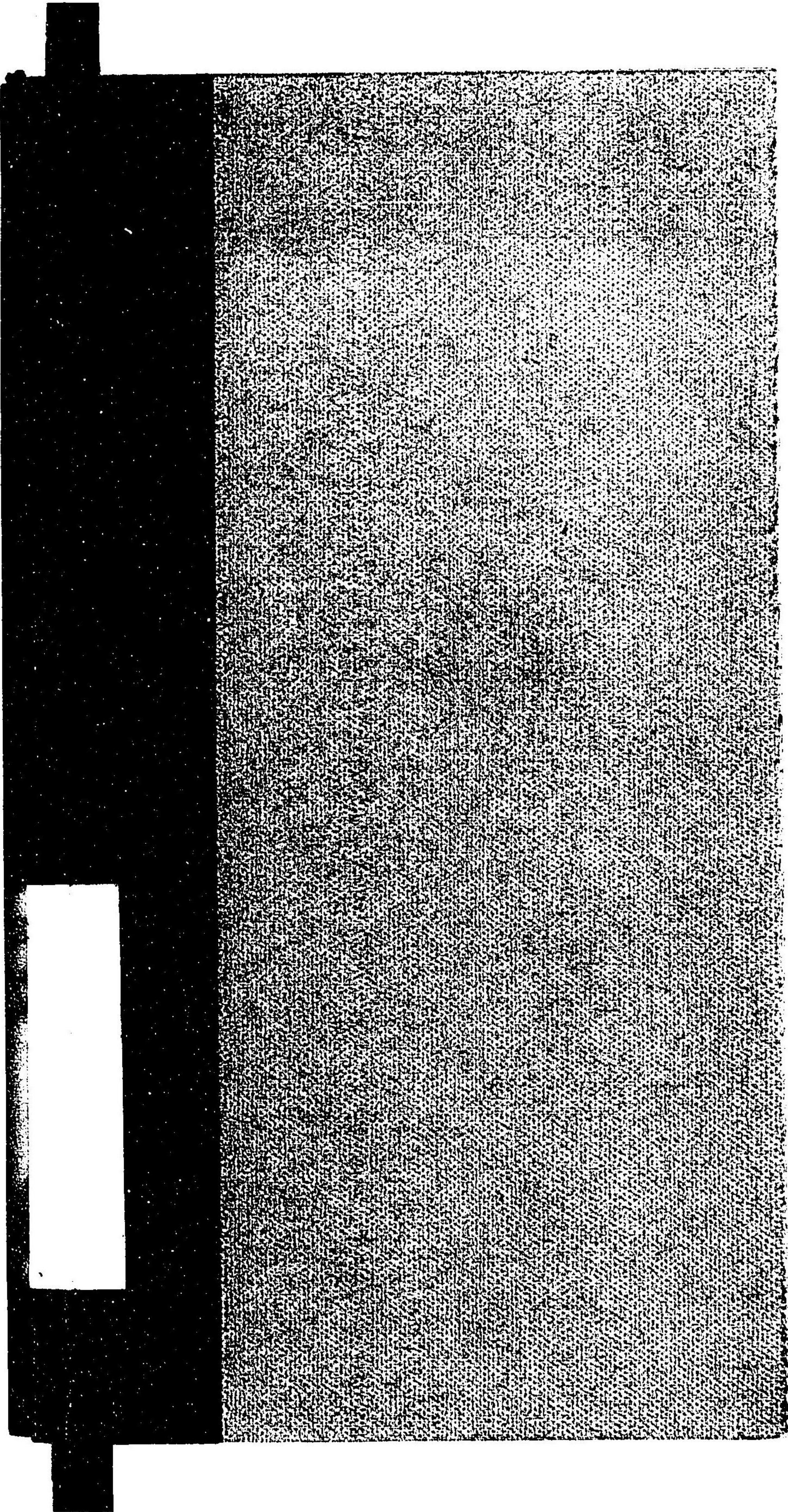
# 生殖の要

正價貳拾錢郵稅四錢郵券代用一割  
増菊判半切十餘個の挿畫意匠斬新  
の製本にして最も美麗の書なり

斯書は字句極めて平易にして小説體に男女の生殖器解剖より筆を起し著者の豊富なる衛生學上の識見に照らし二十五年間の實地經驗に徴して成る、下は幾萬人娼妓の檢微より車夫、馬丁の内情を穿ち上は貴婦人令嬢紳士富豪の情實に鑑み……人身改良法を述べん爲め閨房妊娠の原理を説き結婚、年齢、選婚の注意、養子嫁入の弊、自由結婚の用意夫婦の交情家庭の幸福、強健なる穎才俊兒を設くる法、遺傳の原理、早婚の害、房事過度不妊症、人爲的妊娠法、妊娠分娩論、婦人病并に男女花柳病の原因症狀、豫防法、治療法等を述ぶる懇切周到也未婚者は勿論子女の縁組を欲する父兄は必ず一讀せざるべからざる良書也。

發行所 東京三丁目芝區四番愛宕町 尚綱堂

K-2



特50

195

赤痢速治法

国立国会図書館

059323-000-6

特50-195

赤痢速治法

山崎 増造/著

M39

CBF-0183

